

宇宙の不安定と命の形相

——ディドロの新しい形相理論

あるいは感覚性の唯物論——

沢崎壮宏

「自然の真の性質を理解するためには——そもそも、人間に進化のほんとうの意味を理解できるならばだが——生きているすべての植物、昆虫、動物が、生きている他の植物、昆虫、動物との相互作用を通し、刻一刻と変化している世界をイメージする必要があるだろう」(Michael Crichton, *Prey*, 2002; 『プレイ』(上・下)、酒井昭伸(訳)、早川書房、2003、上巻、p. 5)。

完全者である神の認識から出発しようとする 17 世紀の偉大な哲学者たちにとって、この宇宙もまた完全であることは彼らの体系の論理的な帰結であるように思われる。その場合、顕微鏡がミクロの新世界を切り拓くならば、そこに見出される微小な存在者もまた、それなりの仕方での宇宙の完全性に貢献しているのでなければならない。この宇宙の最善説(optimisme)は、それどころか、不定形(informe)の存在者すら正当化しなければならないのであって、そうなるともう、無秩序(désordre)を称賛することまで余儀なくされてしまいそうである。実際、啓蒙主義の哲学者が原罪(paccatum originale)のドグマを否定するならば、最善説あるいは理神論は、結局のところ、無秩序を引き起こす宇宙の力を承認するに至るのであり、その形の美しさよりもその力の豊かさこそが何にも増して賞賛的となるであろう。

「宇宙とは何でしょうか、ホームズさん。[宇宙とは]そのどれもが破壊への連続的な傾向を示す流転

を被る複合体であり、互いに交錯し、押し合い、そして消滅していく存在者の素早い継起であり、束の間のシンメトリーであり、瞬間的な秩序なのです」(*Lettres sur les aveugles*, OEP 123¹)。

宇宙が永遠の流転の只中にあることは、ディドロにとって、その宇宙が生産的であることの、すなわち、生きていることの可能性の条件ですらある。その生産は、しかも、機械的な複製では決してなく、創発的な生産であり、だからこそ、そのような宇宙には様々なモンスター[奇形]が存在するのだからである。ニーダムを応援するディドロは、それどころか、自然発生(*génération spontanée*)の可能性すら支持してヴォルテールを激昂させるであろう。

「待ちたまえ、自然の作業について発言を急ぎたもうな。二つの偉大な現象が暗示されているのだ。無生氣(*inertie*)の状態から感覚性(*sensibilité*)の状態への移行と、自然発生(*générations spontanées*)と」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 303)。

宇宙を形成する形相がいまだ完成されていないならば、そのような舞台の上で展開される出来事(*événements*)が永遠の規則性に縛られるはずはないのであり、そのような規則性を命ずる神的知性に対する信仰は、したがって、吹き飛んでしまう。この宇宙という舞台で演じられるドラマには何の筋書きもない²。あらゆる出来事が一回限りであるならば、その第一原因を探求しようとすることは空しく、われわれはわれわれにできる精一杯のこと、すなわち、一々の出来事を記述することで満足するのだからである。大衆を啓蒙するはずの18世紀の哲学は、実のところ、哲学者をこそ啓蒙するのであって、その聖なる伝統、その最も根強いドグマティズムに対する最大の抵抗運動なのである。そこには、だからこそ、新しい哲学の可能性が切り開かれているに違いない。

無時間的な知性に歴史的知性が取って代わるとき、範型説(*paradigmatisme*)、プラトン主義の伝統は破綻する。模倣すべきものがないならば、模倣することはもはやできないのであって、宇宙がそのようにしてミメシスの伝統から解放されるとき、その生成の一々が新しい創造であり、そこでは、刻一刻と「事物の新しい秩序が生まれつつある *Rerum novus*

¹ Diderot, *Œuvres philosophiques*, édition de Paul Vernière, Paris, Garnier, 1964.

² フォントネル『宇宙の多数性についての対話 *Entretien sur la pluralité des mondes*, 1686』の成功以来、宇宙をドラマに見立てることはこの時代の最もお気に入りのメタファーである。

nascitur ordo」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 300)のである。しかも、観念の形而上学が描いてきた永遠不変の宇宙、出来事の現象学(phénoénologie des événements)がそのような静的で窮屈な宇宙をダイナミックな宇宙で書き換えるとき、その新しい哲学は、実は、生命現象をマテリアルな語で統一的に説明する可能性でもある。

未完成の形相は、だからこそ、変容することができるのであり、その変容の可能性こそがこの宇宙のダイナミズムである。ダイナミックな宇宙においては、あらゆる存在者の形相が変容するから、どのような存在者であれ、無機物であれ、有機物であれ、生命と呼ばれる全体性を形成することができる、というわけである。変容する形相[柔軟な鋳型 moule mou]から鋳造される全体性は種を固定することができず、それどころか、標準的な個体がないのだから、あらゆる存在者がモンスターですらある。

「自然というものは時間が経つにつれて、どんな可能なものでも産み出しますから、何か奇妙な合成物を創り出すでしょうね」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 340)。

種を形成する個体(individu)は存在せず、種を逸脱する個体(singulier)ばかりが存在するのであり、そこでは、だからこそ、あらゆる個体が他の個体に譲渡することのできない固有の価値を主張することができるようになるであろう。このような形相理論の許容範囲は広く、しかも、新しい。それは、種の進化の可能性も突然変異の可能性も受け入れるのみならず、共同体メンバー各人の個人主義を正当化する可能性ですらある。

そのような複数の新しい可能性を孕む新しい形相理論、ディドロの形相理論はその唯物論哲学が生命現象をも包括することの、言い換えるならば、物質の側から出発して生命にまでアプローチすることの可能性を請合うのであり、その形相理論によって時間的にも空間的にも相対化される宇宙の秩序、かりそめのコスモスこそは、要するに、生命に対する人為的な働きかけ、その技術的な操作の可能性の条件なのである。物質一般の特性である感覚性に変容する形相として働くとき、その活性化の度合いに応じて、あらゆる物質が、潜在的にあるいは顕在的に、生命なのである。無機物と程度の差においてしか異ならない有機物は、したがって、物質を支配する法則によって同じように支配されるのでなければならぬ。生命に固有の原理がもはや不用であるならば、その固有の尊厳が守られなければならない理由もまたなく、物質を操作できる者は生命をも操作できるし、物質を操作することを許される者は生命を操作することも許されるのである。

われわれは、生命の尊厳そのものについて考察することはさておき、その尊厳の喪失に大きく貢献したであろう哲学史上のひとつの重要な局面について考察してみたい。

1．弁神論の世俗化としての美学

世俗主義(laïcisme)の一語が 18 世紀思想の全体を特徴づけると言うとき、その世俗化の意味は、この宇宙の価値がその作者の完全性に言及することなく肯定されなければならない、ということであり、そのような作者の存在を否定することではない。弁神論を世俗化することこそが問題なのであって、弁神の試みそのものを放棄して無神論にまで踏み込むことは多くの啓蒙主義者の主張をはるかに超えてしまう。ライプニッツの最善説を揶揄するヴォルテールにしても、実のところ、この宇宙を構成する諸悪の存在を正当化しようとして、そのライプニッツの『弁神論』に訴えざるをえなかった³。神の存在についてはもはや論じようがないのであって、そのような不可知な存在者の本性を把握できるかのような嘘こそが世俗主義というスローガンの告発の的なのである。

世俗化の使命を帯びる啓蒙主義が原罪のドグマを否定するとき、あらゆる存在者はこの宇宙[現世]においてこそ救済されなければならない。恩寵を不要としてその価値を切り捨てようとする反アウグスティヌス主義はルネッサンスのヒューマニズムを継承する自律的な精神エネルギーの現れであり、その人間的な価値を是認するための舞台は、今後、形而上学からシャフツベリと共に美学へ、そしてルソーと共に政治学へと移行するであろう⁴。

シャフツベリがこの宇宙の美しさを発見するとき、その発見はダイナミックな自然、「造形的自然(plastic nature)」の発見であり、その造形作用を美しいと言うならば、人間精神の自由で内面的な造形作用もまた称賛されるのでなければならない。シャフツベリが「すべて美しいものは真でもある(all beauty is truth)」と言うとき、この宇宙を構成する真理は人間精神の美的経験においてこそ現れ出てくるのであり、その場合、宇宙の創造と美的作品の創造、宇宙を創造する神の力と芸術作品を創造する人間の力とは同じ力、どちらも新しい形相を創造する力である。自らが範型となって創造する知性、原型的知性(intellectus archetypus)がいまや伝統的な模写的知性(intellectus ectypus)に取って代わり、既製品をではなく製作の行為そのものを、生成されたものをではなく純粋な生成のプロセスそのものをこそ模倣し

³ Cf., Voltaire, *Dictionnaire Philosophique*, 1764, « Bien (Tout est) ».

⁴ Cassirer, E., *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen, Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1932, IV 1 ; 『啓蒙主義の哲学』、中野好之(訳)、紀伊国屋書店、1962、p. 187。

ようとする。模倣すべき形相そのものがダイナミックなのであり、したがって可変的なのである。

シャフツペリが依然として芸術家に自然の模倣を命ずるとしても、その模倣すべき自然はいまや「造形的」であり、それは、言わば、二度とは同じポーズを取ることなく絶えず動き回っているようなモデルである。そのような厄介なモデルを真似るためには、その一々のポーズではなく、そのポーズを形成する作用そのもの、その豊かな力の源をこそ真似るしかない、というわけである。

シャフツペリの自由訳(*Essai sur le mérite et la vertu*, 1745)がその哲学的キャリアの出発点であるディドロ、彼は美を初めて世俗的に定義したことで知られている。

「私に関係なく美しいと私が呼ぶものは、私の知性の中に関係の観念を呼び覚ますだけのものを含むものの全体である。そして、私にとって美しいと呼ぶものは、その観念を呼び覚ますものの全体である」(*Encyclopédie*, « Beau »)。

やはり自然に学ぶことを命ずるディドロの美学は、しかしながら、同じく自然を模倣しようとしてきたはずの伝統、ミメシスの伝統が教える美的カノン[幾何学的なシンメトリー]の悉くに反旗を翻すのであり、美学生をそそのかして規則尽くめの教室を飛び出させようとする⁵。ディドロにとって、模倣されるべき本当の自然はいかなる法則にも決して永遠には縛られることのないダイナミックな自然であって、そのダイナミズムをこそ模倣すべき芸術家は、だからこそ、その創作活動を縛るあらゆる種類の規則から解放されなければならない。学ぶべき自然が絶えず変転しているならば、自然を模倣することはそれとダイレクトに向き合うこと以外ではありえないのである。

「自然は不正確なことは何もしない。どの形相も、美しいものであれ、醜いものであれ、その原因をもっている。そして現実存在するあらゆる存在者で、然るべき仕方存在しないものは一人もいない」(*Essais sur la peinture*, OEE 665⁶)。

⁵ 「運動の一般的な組合せ、匂いを嗅がれ、眼で見られ、頭から足まで広がり駆け巡る、その組合せが学ばれるのは学校においてではない」(*Essais sur la peinture I*, OEE 670)。

⁶ Diderot, (*Œuvres esthétiques*, édition de Paul Vernière, Paris, Garnier, 1964.

美しく存在することは、ディドロにとって、幾何学的なシンメトリーを形成することではない。今後、宇宙の形相は対称性を形成しようとするどころか、反対に、あらゆる対称性を破壊しようとする衝動として現れてくる。

2. 数学的学問という理念の後退

実際、数学に唯名論的な価値しか認めないディドロにとって⁷、数学の教えるシンメトリーは言葉の上での美しさ、トートロジーに対する美辞麗句でしかない。

「私たちは現在、諸科学における大革命の時期に差しかかっている。人びとの精神が道徳や文学や博物学や実験物理学に対して抱いているように思われる愛好心から察して、私は、思い切ってこう断言したいくらいだ。100年を出ないうちに、ヨーロッパでは、大幾何学者を3人と数えることができなくなるだろう、と。この科学は、ベルヌーイ、オイラー、モーペルチュイ、クレロー、フォンテーヌ、ダランベール、ラ・グランジュなどのような大家によって打ち捨てられた地点で、はたと歩みを止めてしまうであろう。彼らはヘラクレスの円柱を建てたようなものだ。誰もそれを超えて進むことはないだろう」(*De l'interprétation de la nature*, 4, OEP 180-181)。

ガウスが『整数論 *Disquisitiones arithmeticae*』(1801)を著して近代数学の革新に着手するとき、ディドロが『自然の解釈に関する思索』(1753)を執筆してからまだおよそ半世紀しか経っていない。数学の将来に関するディドロの予言はまるで見当違いであるけれども、記号体系の生産性についての無知を暴露するかのそのようなその発言は、そうはいうものの、18世紀半ばの学問状況をよく表現している点で見直される価値がある。それは、数学的自然科学の理念の後退と純粹に記述的な自然科学に対する要望との表現なのである。

「今日最大の勇氣と力とをもって公にされた真理の一つ、優れた自然学者が今後決して見失うことなく、またきつと最良の結果をもたらすに違いない真理の一つは、数学者の領域は知的世界であり、そこで厳密な真理と理解されているものがわれわれの地上の世界に移されるとき、この利点[厳密な真理という]を絶対に失うということである」(*ibid.*, 2, OEP 178)。

⁷ 「抽象物なんてありませんよ。命題をもっと一般的なものに、言語活動をもっと敏速に、もっと便利にす

ニュートン主義を自然学の外側にまで拡大してあらゆる種類の学問を統一しようとすることは18世紀がデカルトから相続する偉大な夢であり、数学に基づく規則性の発見法、解析の方法は、実際、そのような夢の実現可能性を約束しているかのように見える。生命現象の多様こそは、しかしながら、そのような方法的一元論あるいはステレオタイプ化に対する最大の抵抗勢力を形成するのであり、生命という現象を彩る個々の固有性をこそ観察の対象とする自然誌[博物学]の伝統は、だからこそ、恣意的に構成される人間的概念の宇宙への押し付けに反対して最大の告発の声を挙げるであろう⁸。実のところ、カッシーラーに説得されるならば⁹、18世紀にもう一つの別の科学革命を想定し、ニュートンをビュフォンで、『プリンキピア』を『自然誌*Histoire naturelle*』(1749)で置き換えてしまいたい気にすらなってくる。

第一原因の探求を放棄して現象主義を支持する点でニュートンに重なるように見えるビュフォンは、しかしながら、はるかに慎重である。

「ちょうど人類の歴史を研究する際にわれわれが、古文書を参考にしたり鑄貨やメダルを調べたり古代の碑文を解読したりして、人間の歴史上の革命や精神の新紀元の時期を決定するのと同じように、自然の歴史においてわれわれは、この世界の記録を探索して地中から最古の遺物を掘り出した断片を収集し、自然のさまざまな年代に遡りうるあらゆる物理的変化の徴候をまとめあげて、それらを一つのまとまった証拠に統一しなければならない。これこそ無限の空間のうちに確実な支点を設定し、時間の無限な流れのうちに何ほどのか里程碑を立てるための唯一の方法であろう」(Buffon, *Histoire naturelle*, I, p. 97)。

る、習慣的な黙説法や省略法があるだけです」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 369)。

⁸ ビュフォンとの共同戦線を張るディドロはリンネの分類学を方法主義(*méthodisme*)として告発する：「存在者に基づいて概念を改めることなく、自己の概念に基づいて存在者を形作ることこそが任務であるように見える。すべての哲学者の中で、こうした熱狂が方法主義者におけるほどはっきりと支配している哲学者はいない。一人の方法主義者がその体系の中に四足獣の頭を持った人間を入れると、彼はもはや自然の中に人間を四足の動物としてしか見ない。人間が賦与されている最高の理性が動物という呼称に反対を唱え、彼の組織が四足獣の組織と矛盾していても無駄である。自然は彼の眼を天の方に向けさせたが、それも無駄である。体系的な先入見が彼の体を地の方に曲げるのである。その先入見によれば、理性はより完全な本能にすぎない。先入見は、人間がその手を二本の足に変えようと思いつく場合、人間がその足を使う習慣をなくするのは、ただ習慣がなくなりさえすればいいのだと、まじめに信じているのである」(*De l'interprétation de la nature*, 48, OEP 222-223)。

⁹ 「今や考察の重心が定義から記述へ、類から個へと移動するにつれ、機械論の原理はもはや唯一にして十分な説明根拠として妥当しなくなった。今や存在から生成をでなく、逆に生成から存在を導出し理解しようとする自然観への推移が開始されたのである」(Cassirer, *op. cit.*, II 5 ; p. 99)。

一回限りの宇宙の歴史、その遍歴のユニークさをこそ見極めようとする「自然の考古学」が自然学の重心を定義から記述へ、その考察の対象を普遍者から個物へと移行させるとき、そのことによって固有の履歴を認められるこの宇宙は無数の可能宇宙の中の一つの宇宙以上のものであり、その現実の生成はそのような可能性の補完以上のものである。機械論から自然誌＝考古学への重心の移行において、われわれはいまや二者択一を迫られている：宇宙の調和を説明する形相か？宇宙の歴史を説明する力か？

機械論と自然誌との拮抗が突きつける二者択一、そのアポリアを止揚して新しい形相理論を与えようとするディドロは単なる折衷主義者ではない。その新しい形相理論に基づいて唯物論が築かれるとき、物質理論はようやく生命現象を取り込むことができるのである。

「生命とは一連の作用と反作用である」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 313)。

3．感覚性(sensibilité)に基づく唯物論

ニュートン主義者が機械論的説明の生命現象に対する無力を痛感させられるとき、「人間機械(homme-machine)」のテーゼは 18 世紀における最大のパラドックスとして現れてくる。全面的な他性によって互いに区別されるはずの精神と物質とが人間において奇妙にも合一するとき、その不可解な合一は、しかしながら、人間的な経験そのものであって、だからこそ、経験の側からは疑うことのできない事実、決して揺らぐことのない事実である。

デカルトの宇宙をロックが揺るがして以来、その二元論というアポリアは 18 世紀精神の最大の哲学的関心事でありつづけた。

「われわれは恐らく、純粋に物質的な存在者が考えるかどうか、決して知ることはできないであろう。というのも、われわれは、啓示がなければ、然るべく配置されている何らかの物塊に神が知覚し思考する能力を与えなかったかどうか、あるいは、そのように配置された物塊に考える非物質的実体を加えて結びつけなかったかどうか、われわれ自身の観念を観想することによって明らかにすることはできない」(Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, 1690, IV 3-6)。

物質は果たして考えることができるのか。物質一般に感覚性を与えるディドロが物質の一元論で肯定的に答えるとき、感覚性の活性化の度合いの連続的な変化は宇宙に全体性を与

えることの、したがって、宇宙全体を一つの生命と見なすことの¹⁰、だからこそ、そのあらゆる生成変化を統一的に説明し尽くすことの可能性を与えてくれる。

「感覚性が物質とは本質的に両立しないということがどうして分かるのかね。君は、物質であれ感性であれ、どんなものの本質も知らないくせに」(*Entretien entre d'Alembert et Diderot*, OEP 277)。

ディドロにとって、感覚性はあらゆる物質に、したがって、存在者の全体に共通に認められる特性(*propriété générale de la matière*)であり、しかしながら、不平等に配分されていることによってあらゆる多様性を産み出すことのできるようなものである。そのような「万事を説明する単純な仮定」の設定を「常識」(*ibid.*, OEP 276)と見なすディドロ、彼のロックへの回答は、要するに、18世紀精神[ニュートン主義の拡大]の延長線上にあって、生命現象を唯物論的な説明に取り込んでしまおうとする目論見に貫かれている。物質一般に感覚性という特性を与え、そして、その活性化に連続的な段階を認めることは、そのような統一的説明の可能性のための取っておきのトリックなのである。

ビュフォンの両肩に立ってさらに遠くを眺めようとするディドロはビュフォンが躊躇するところで躊躇せず、ロックが判断を保留するところで断定を下し、あらゆる種類の純粋な精神的実体の可能性をすっかり破壊してしまう。あらゆる種類の存在者が、その感覚性の度合いに応じて(*active ou inerte*)、多かれ少なかれ物質であるならば、例外なくその一切がニュートン主義の軍門に下るのでなければならない。思惟することも感覚することの一つの変容でしかないから¹¹、決定論は精神世界にまで及ぶのであり、神であれ人間であれ、もはや自由な意志決定の余地はないはずである¹²。

¹⁰ 「一群の蜂をただ一匹だけの動物に変えようとなさるんですか。それじゃあ蜂をくっつけている脚をお融かしなさい。隣接していた蜂を連続したものになさい。群のこの新しい状態とその以前の状態との間には確かに顕著な相違がありますが、この相違は、以前は動物の集まりで、その群が今は一つの全体、一者なる一匹の動物であるということにほかならないのです。[...]。この蜂の群が極々小さいので、その構造があなたの鉄の粗い刃からは、いつもすり抜けるものと仮定してご覧なさい。そうすれば、あなたが気の済むまで分割をお続けになっても、蜂を一匹も死なせることはないでしょうし、眼に見えない蜂でできたこの全体は、潰さなければ壊れない、真正正銘のポリープになるでしょう」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 293-294)。1740年にTrembleyが水棲ヒドラ(*polype*)の自己再生を報告している。

¹¹ 「われわれは感覚性と記憶[感覚性の共鳴]とを賦与された楽器なのだ」(*Entretien entre d'Alembert et Diderot*, OEP 274)。

¹² 「自由とは、われわれの行動の最後のものが一者たる一つの原因の必然的な結果であるということです」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 363)。

「神様ですら宇宙の中では物質であり、宇宙の一部分であり、有為転変(vicissitudes)を免れないでしょうから、それは年寄りにもなりましょうし、死にもしましょうよ」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 317)。

ところが、そのような全面的な決定論の代償が新しい形相理論[柔軟な鑄型]の採用であるならば、われわれは、何とも皮肉なことだが、ニュートン主義を拡大することによって宇宙の斉一性の原理を失うということになる。数学主義を放棄するディドロの唯物論的決定論は、結局のところ、非決定を決定しているようなものである。

「おお、哲学者諸君、私の手に触れうる極点、諸君の有機体が見える極限を超えて、この宇宙の果てに、私と一緒に想像の翼を伸ばしていただきたい。そして、この新たな大洋の上を彷徨い、諸君が今のその知恵を称えておられるあの叡智的存在者のいくつかの痕跡がもし見つけられるものなら、その不規則な波動の中を探して御覧なさい！」(*Lettres sur les aveugles*, OEP 123)

3.1. 存在者の連鎖

あらゆる可能性が充満しているからこそ、この宇宙は非決定に陥らざるをえない。あらゆる可能性が充満しているからこそ、感覚性の活性化の度合いは連続的なのであり、だからこそ、この宇宙は最大の多様性を享受することができる、というわけである。あらゆる存在者は、そこでは、感覚性という一本の共通の鎖によって連結されており、その存在者の連鎖に隙間がないからこそ、その梯子[ポルピュリオスの樹]を登り降りするわれわれは、地上[無]から天上[無限]に至るまで、ミクロの世界からマクロの世界までの全体を包括することができるのである。

ラブジョイは「存在者の連鎖chain of being / chaîne des êtres」というアイデアの源流をプラトンの『ティマイオスThimaios』(30 c)にまで遡って求め、以降、彼岸趣味によるその隠蔽と生き残り[流出説→神の愛→充足理由律]の歴史を詳しく辿っているけれども、世俗主義の18世紀においてこそ、その隠蔽のヴェールは終に取り払われるのである¹³。彼岸趣味に

¹³ Lovejoy, Arthur O., *The Great Chain of Being – A Study of the History of an Idea*, Harvard University Press, 1936, VI; 『存在の大いなる連鎖』、内藤健二(訳)、晶文社、1975、p. 191-219。ポーブの詩がこのアイデアを要約している：「存在の巨大なる連鎖よ、神より始まり、靈妙な性質、人間の性質、天使、人間、けだもの、鳥、魚、虫、目に見えぬもの、眼鏡も及ばぬもの、無限より汝へ、汝より無に至る。より秀れしものに我等が迫る以上、劣れるものは我等に迫る。さもなくば、創られし宇宙に空虚が生じ、一段破れ、大いなる

決着をつけようとする世俗化の思想動向のみならず、新しい観測機器の発明とそれによってもたらされる新発見の数々もまた、充満の思想にとっては大きな推進力であったことを忘れてはならない。望遠鏡による新しい天体の発見が天空の空虚を埋め合わせ、顕微鏡によるミクロ世界の発見が見えない世界の充実ぶりを暴き立てるとき、この宇宙にはもはや、すでに存在している者が変形するのではなければ、自然発生の余地など残されていないように見えてくる。さらに、どのような種の間にも中間的タイプを発見してきた自然誌の伝統は、そのアイデアの最も根強い擁護者であり続けてきたのであり¹⁴、だからこそ、その記述的方法が数学主義に取って代わるならば、充満する存在者は連鎖しなければならないのである。

ビュフォンはそれでも種を変動させようとまでは考えなかったようである。だが、存在者を連鎖させるだけでは満足しないディドロは、さらに、その種を変動させようとさえするであろう。ディドロにとっては、実のところ、性別すら固定されておらず、彼のお気に入りの話題の一つがアンドロギノス(hermaphrodites)であったことはよく知られている¹⁵。

「男は恐らく女のモンスターであり、女は男のモンスターである」(*Le Rêve de D'Alembert*, OEP 328)。

「存在者の連鎖」の思想をビュフォン以上に支持するディドロは、しかしながら、その系であるはずの単線的な格付けのアイデアについては継承しなかった。宇宙の全体をくまなく覆い尽くすはずの存在者は僅少の差によって段階づけられているからこそ天空に掛ける橋なのであり、だからこそ、伝統の要求する上昇志向、神との合一の理想、との衝突に折合いをつけて生き延びていくことができたのであった。しかしながら、無神論者ディドロ

階段は崩れ落ちよう。自然の鎖より輪を一つ打ち落とせば、十分の一、千分の一の輪にかかわらず鎖もこわれ落ちよう」(Pope, *An Essay of Man*, 1833-34, I, 42-3 & 45-6)。

¹⁴ 「無生物より生物へと徐々に移って行くのでその連続が境界を曖昧にする。そして両者に属する中間種がある。なぜなら植物が無生物の直後に来、植物は生命に与る度合により相互に異なる。[植物の]種類全体としてみれば、他のものと比較すれば明らかに生きていようだし、動物と比較すれば生きていないようだ。そしてこの植物から動物への移行は継続的である。何故ならある種の海洋生物は動物か植物か疑問がある。何故ならそれらの多くは岩にくっついていて岩から離すと死んでしまうからである」(アリストテレス『動物学』VIII 1, 588 b)。

¹⁵ 「第六感の可能性、正真正銘の半陰陽の可能性を否定する人々は粗忽者ということになるわけですね」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 321)。トレンプレーの発見(1740)に興奮したディドロは、さらに、人間ポリープ(polypes humains)の可能性についてすら空想しており、シャム双生児を引き合いに出して生命の分割・結合の可能性を示唆しようとする(*Ibid.*, OEP 296)。

には、もはやそのような霊事との折合いをつける必要などない。あらゆる存在者が多かれ少なかれモンスターであるような宇宙においては、地上から天上へとわれわれを導いてきたはずの梯子は横様に倒れ、それはいまや、「蜘蛛の巣」のように、地上の全面を張り巡らしているのである。

「巣の真中に一匹の蜘蛛を想像してご覧なさい。その糸を一本揺り動かしてご覧になれば、そのすばしっこい動物が駆けつけてくのが見えるでしょう。さてそこで、その昆虫が、好きなときに腸から引っ張り出したり、手繰り入れたりする糸が、その虫自身の感覚性の一部分をなしているとしたら……。 [...]。糸は至るところにありますよ」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 314-315)。

ディドロが蜘蛛に脳を、その巣に脳をその中枢とする神経ネットワークを暗喩させていることは明白であり、実のところ、当時すでに施行されていた脳外科手術は脳の可塑性をもう報告している(*ibid.*, OEP 331)。その機能の回復可能性あるいは代替可能性を説明しようとする者にとって、あらゆる機能に連続性を認めようとすることは殆ど不可避の解決策であったろう。脳の柔軟性に対する驚きは大きく、ディドロは、実際、そのちょっとした変容が想像できる限りのモンスターを産出する様子を描いてみせる¹⁶。

3.2. かりそめのコスモス

様々な事件(*événements*)の充満する宇宙は原始スーブの混沌の中から始まった。

「[混沌とは]オケアノスでも元素的で純粋な水でもなく、一種のぬかるみ(*bourbier*)と理解されなければならず、その発酵がこの宇宙を時間の中に産出したはずなのである」(*Encyclopédie*, « *Chaos* »)。

宇宙の生成を支配する形相が柔軟な鋳型でしかないならば、発酵する原始スーブをコントロールしてコスモスを導いてくれる自然法則に期待することはもはやできない[数学主義の後退]。永遠真理に支配されることのない宇宙は絶対的な安定を失い、もはや永遠でも斉一的でもないものであり、斉一的な宇宙に取って代わるローカルな宇宙は、せいぜいのところ、かりそめのコスモスを実現することしかできない。

カオスからコスモスへの運命的な移行を主張するストア主義、その第一質料のアイデア

¹⁶ 「動物[= 脳]は自分自身の主人、心の主 *mentis compos* である」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 346)。

を相続するデイドロは、しかしながら、その運命論までは相続しない。他方でエピクロス主義から原子論的な唯物論を相続するデイドロにとって、そのような運命の執行を司るべき精神的な実体はもはや存在しないのである。不定形の原始スープは、しかしながら、その全体に内在するエネルギーについて言うならば、その全体量は恒常的に保存されるであろう¹⁷。

「何もかもが変化し、移り行き、残るのは全体だけである」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 300)。

物質一般に内在する感覚性がその全体量を保存するならば、機械論を克服しようとするそのアイデアは、実のところ、エネルギー論を先取りしているとすら言えるのであり¹⁸、学問の可能性はその全体性を問題にすることにこそ存している。

「一つの事実の絶対的な独立ということは、全体という観念と相容れず、全体という観念なしには哲学もまたありえない」(*De l'interprétation de la nature*, 11, OEP)。

宇宙を構成する諸粒子、その組合せの絶対的な不安定は、その全体の恒常的な安定と対照的である。われわれは、その不安定がデイドロの思索の深化とともにその度合いを増してきた、ということを指摘することができる。原始スープの混沌の中にモンスターの存在の可能性を認めようとする『盲人書簡』(1749)は、そうはいうものの、その数の減少によって宇宙の進化の度合いを測ることができると主張する。

「たとえば、あなたやライブニッツやクラークやニュートンに、動物が創られた最初の頃に、あるものは頭がないとか、また、あるものは足がないといったことがなかったと、誰が教えたのかとは、お尋ねしてもよいわけです。その動物の中のあるものには胃がなかったし、またあるものには

¹⁷ 伝統的な解釈がストア主義と結び付けてきた「ただひとり巨大な個物(un seul individu)だけが存在する」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 312)というフレーズは、むしろ、エネルギー論と結び付けるほうが興味深いと思われる：「総質量を見たまえ」(*ibid.*)。

¹⁸ 「運動というものは移動させられる物体の中にも静止する物体の中にも等しく存在しているのだ」(*Entretien entre d'Alembert et Diderot*, OEP 259)。「力の量は自然にあって一定している。しかし潜在力(nisus)[=位置エネルギー]の総和と移動(translation)[=運動エネルギー]の総和とは可変である」(*Principes philosophiques sur la matière et le mouvement*, OEP 395-396)。

腸がなかったことや、胃と口蓋と歯から見て長い存続を約束されたように思われるある種の動物が、心臓が肺臓の欠陥のために絶滅してしまったことや、奇怪な動物どもが次々に滅び去ったことや、物質のあらゆる不完全な組合せは消滅して、残ったものは、ただ、体の構造に重大な矛盾を少しも含み、自力で生き長らえ、永続しうるものだけだったなどとは、私としてあなたに向かって主張できるのです。

「こんなふうに仮定したら、もし最初の人間の咽頭が閉ざされていたり、適当な食物が手に入らなかったり、生殖器官によって罪を犯したり、配偶者に巡り合えなかったり、または他の種の中に子孫を残したりしたとしたら、ホームズさん、人類は一体どうなっていたでしょう。宇宙全体の浄化作用の中に呑み込まれてしまったことでしょう。そして、人間と呼ばれるこの高慢な存在は可能な存在の中に数えられるに過ぎないでしょう。

仮に形を成さない存在はいまだ嘗て現れたことがないとしたら、今からもそんなものは決して現れないし、おまえは根も葉もない仮説に陥っているのだと、あなたはきっと主張なさるでしょう。しかし、秩序とはそんなに完全なものじゃありませんよ、いまでも時折は、モンスターが現れることがあるくらいにはね」(*Lettres sur les aveugles*, OEP 122)。

原始スープの混沌に由来する奇形、若いディドロにとって、モンスターはどこまでも抹消されるべき運命にあり、そこに新しい種の誕生する可能性は見当たらない。『盲人書簡』のディドロはまだ種の不変説(fixisme)を支持している。

変遷説(transformisme)を支持するディドロは『自然の解釈に関する思索』(1753)において最初に登場する。

「自然は無限に多様な仕方、同一のメカニズムを多様化させることを好んだかのように思われる。自然は個をありとあらゆる可能な相の下に多様化した後初めて一つの種族を放棄する。動物界を観察して、四足獣類の中には他の四足獣に全く同じ作用や部分——特に内部の——をもつ四足獣が一つもないということに気づく時、最初の動物、一切の動物、一切の動物の原型(prototype)があって、自然はその一部の器官を長くしたり、短くしたり、変形したり、多様化させたり、抹消したりするに過ぎないと信じる気にならないだろうか」(*De l'interprétation de la nature*, 12, OEP 186-187)。

唯一同一のプロトタイプの複雑化によってあらゆる種類の生物の可能性を説明しようとするディドロにとって、モンスターはもはやノーマルと同根であり、その差は純粋に統計的

な差、個体数が少ないというただそれだけのことである。

「人間はありふれた結果に過ぎず、モンスターは稀に見る結果であるに過ぎない。両方とも等しく自然であり、等しく必然的であり、同じように宇宙普遍の秩序に適っている」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 310-311)。

しかも、『ダランベールの夢』三部作における晩年のディドロがさらにその過激さを増していることはすでに見た通りであって、スタンダードが絶えず変動するならば、あらゆる存在者がその逸脱者なのであり、したがって、モンスターなのである。

「物質というこの広漠たる大洋の中には、互いに似通っている分子はないし、一瞬も変わらない分子は一つもない。Rerum novum nascitur、これが分子の永遠の碑銘だ」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 300)。

モンスターの巣窟であるこの宇宙、その全体性において恒常性を見極めようとする学問は、その場合、そのようなモンスター群に対してどのようにアプローチすることができるのであろうか。というのも、絶えず変動する群れの全体を尽くすことなどとてもできない。

3.3. 人間学

この宇宙の有為転変は、そうはいっても、われわれに同一性を許すほどには緩慢である。なるほど完全に同一な個体は存在しないかもしれないが、種を形成するほどに似ている個体群を同定することはできるし、その種は、永遠者の眼から見れば変動するにしても、人間的なスケールの時間においては固定していると言っていいようなものである¹⁹。

「世界がどのくらい長く存続するかをあなたが判断なさるのは、カゲロウがあなたの寿命を判断するようなものだということです。世界があなたにとって永遠に続くように見えるのは、ちょうどあなたが一瞬の命しかない存在にとっては、永遠に存在するように見えるのと同じなのです」(*Lettres sur les aveugles*, OEP 123-124)。

¹⁹ 「[存在者とは]一定数の傾向の総和である」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 312)。

「カゲロウの屁理屈 le sophisme de l'éphémère」(*Le Rêve de d'Alembert*, OEP 303)を逆手に取るならば、人間に固有なスケールを発見することが人間的な学問の可能性を請合ってくれるのであり、世俗化された人間には、いまや、そのような学問の可能性しか残されていない。永遠者のスケールに比べればかりそめでしかない安定は、そうはいっても、人間的なスケールにおけるコスモスの可能性を請合うには十分に持続するのであり、人間的な合理性＝人間学の可能性がそのようにして請合われるならば、ディドロの無神論が知のアナーキズムを導くことはないのである。

われわれは、反対に、人間学を構成する規則性、自然法則(*lois naturelles*)と呼ばれるものを永遠化することをこそ避けなければならない。それこそ、人間の理解可能性に都合のよい規則を勝手に構成して宇宙に押し付けようとする事なのだから。「カゲロウの屁理屈」に騙されないためには、束の間のコスモスを絶えず交代させ続ける宇宙、そのかりそめの住人でしかないわれわれは、その交代劇に合わせて新規の規則を次から次へと構成していくのでなければならない。そして、そのようにして認識を新たにしていくわれわれの形成するコミュニティも同じように、その指導規則である自然法(*droits naturels*)を次から次へと構成していくのでなければならない。そのように考えるならば、ディドロが自然法についてのオーソドックスな理論を支持しないことに驚く理由はないであろう²⁰。

結論

ニュートン主義の徹底が生命科学の形成に成功するためには、物質が生命の柔軟性を取り込むことがその可能性の条件であり、そのためには、そのような物質から構成される宇宙もまた柔軟であるのでなければならない。その柔軟性が力、モンスターであるにしても、とにかく真新しいものを産み出す力と理解されるならば、未完成な宇宙こそが美しいのであり、そのとき、安定した体系、完成したコスモスを築こうとする精神は、もはや、宇宙の真の美しさを映す資格を剥奪されている。

未完成の形相は柔軟な鋳型として働き、その働きの結果である宇宙は、せいぜいのところ、かりそめのコスモスを出現させることしかできない。われわれは、ディドロの新しい

²⁰ 「盲目的運命が世界における一切の事象を作り出したと主張した人たちは、まったく馬鹿げたことを言ったものである。なぜならば盲目的な運命がこの人間という英知的な存在者を産出したなどという仮定以上に馬鹿げた話がありうるであろうか。それゆえ始原的な理性(*une raison primitive*)が存在しているのであり、法はこの理性と個体の関係、あるいは個体相互間の関係にほかならぬものである」(Montesquieu, *L'Esprit des lois*, le début)。

形相理論が宇宙を永遠の不安定に陥れてしまうことを結論しなければならないけれども、その不安定は、そうはいうものの、救いようのない絶望的なものではなく、われわれはむしろ、その不安定の中にこそ人間的な救済の可能性を見出すことができる。未完成な宇宙の住人であるならば、人間だけが完成されているはずもなく、未完成の宇宙が美しいならば、これから完成されるはずの人間もまた美しいのである。永遠に変転し続ける宇宙は思いもかけないモンスターを産み出すけれども、だからこそ、人間もまた新しい秩序を、自然の秩序であれ、社会の秩序であれ、創出することができるであろう。

真理にしる、自然法にしる、デイドロにとっては、もはや直観に与えられるような完成されたものではなく、人間がこの宇宙の遍歴に合わせて、その都度、構成し直し続けなければならないようなもの、永遠の未完成品である。自らを縛る規則を自ら構成し続ける人間、その価値がその行為の結果ではなく、その行為そのもの、その完成可能性(perfectibilité)、その社交可能性(sociabilité)において発見されるとき、われわれは人間のスケールに真に見合った人間的な学問の可能性を発見しているのである。

(京都市立看護短期大学非常勤講師)

L'ambiguïté de l'univers et la forme de la vie

– La nouvelle théorie diderotienne de la forme et son matérialisme de sensibilité –

Takehiro SAWAZAKI

Pour ceux qui trouve chez Diderot la subversion de l'idée platonicienne de la forme, la forme, *eidos*, n'est jamais accomplie : *rerum novus nascitur ordo*. Dans la nouvelle théorie de la forme comme moule mou, là enfin, le dynamisme leibnizien voit la victoire monumentale sur le statisme ancien. Désormais, au fatalisme stoïcien se substitue la vicissitude éternelle du monde qui fait apparaître au mieux un *cosmos* passager, au providentialisme se substitue le monde aléatoire, tout peuplé de monstres, où on ne peut plus supporter le fixisme.

Diderot, partisan de Buffon, donc de la tradition de l'histoire naturelle, se révolte contre la géométrisation du monde qui se destine à tomber devant la vie, pierre d'achoppement pour le newtonianisme qui hérite de Descartes du rêve de la *mathesis universalis*. Voilà la raison suffisante de la sensibilité comme propriété générale de la matière, truc précieux qui permet aux matérialistes français du 18^e siècle de tout expliquer en termes matériels. Ainsi, c'est paradoxalement au pris du mathématisme universel que le newtonianisme arrive à contenir la vie dans son unique système.

Se détournant de la science mathématique, la théorie diderotienne de la forme conclut-elle donc au anarchisme intellectuel ? Non. Au contraire, elle nous donne la possibilité de l'anthropologie où tout étant se mesure à l'échelle propre à l'homme, distincte de celle de Dieu. Ainsi laïcisée, détachée de la tradition de la *mimesis*, l'anthropologie ne s'accomplira jamais, mais progressera toujours pas à pas.